

当案内及び過去に発行した案内は弊社ウェブサイト(<http://www.medience.co.jp/>)よりPDF形式にてダウンロードできます。

新規受託項目のお知らせ

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のお引き立てをいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、弊社では皆様のご要望にお応えするため、検査の新規拡大に努めておりますが、この度、下記項目の検査受託を開始することとなりました。

取り急ぎご案内致しますので、宜しくご利用の程お願い申し上げます。

敬具

記

新規受託項目

- [25603] マイコプラズマ・ニューモニエ核酸同定《LAMP法》
- [25604] レジオネラ核酸同定《LAMP法》

受託開始日

- 平成24年4月2日(月)

マイコプラズマ・ニューモニエ核酸同定

マイコプラズマ・ニューモニエ (*Mycoplasma pneumoniae*) は培養に細胞が不要な自立増殖型細菌において最小であるマイコプラズマ属の一菌種です。昨年は、我が国では過去10年間で最大と思われる流行がありましたことは記憶に新しいところです。

マイコプラズマの培養・同定には PPLO 培地と呼ばれる特殊な培地が必要であり、生育が遅いため数週間の培養期間が必要とされるので、診断には抗体検査が用いられていました。そのため診断が困難な場合も多く、また感染初期の抗体価上昇が緩慢なこともあるため、有意の感染があったかどうかを調べるペア血清を用いた検査でも判断に苦慮する場合があります。

近年、肺炎は増加傾向にあり、レジオネラ感染症が中高年以上に好発であるのに対し、マイコプラズマは小児から若年世代への感染が多く、またヒトからヒトへ飛沫感染するため、学校内などの集団感染例も珍しくありません。

本検査は LAMP 法により、マイコプラズマ・ニューモニエに特異的な DNA を簡便に同定するもので、マクロライド系抗生剤に高度の耐性を持つ場合も多いため時によっては遷延・重症化するマイコプラズマ感染症を迅速に診断することが可能です。

検査要項

項目コード	25603
検査項目名	マイコプラズマ・ニューモニエ核酸同定
検査材料 (採取容器)	喀痰:1.0mL (採取容器55番でご提出下さい) 咽頭・鼻咽頭拭い液 (滅菌プラスチック軸の綿棒で拭い、採取容器55番でご提出下さい)
保存方法	凍結(-20℃)
検査方法	LAMP法(Loop-Mediated Isothermal Amplification)
基準値	検出せず
所要日数	3~6日
検査実施料	300点([D023-4]微生物核酸同定・定量検査)
判断料	150点(微生物学的検査判断料)
定価	9,000円

参考文献

山口恵三, 他: 医学と薬学, 58(4), 565~571, 2007.

レジオネラ核酸同定

レジオネラ・ニューモフィラ (*Legionella pneumophila*) はレジオネラ属の一つで、ヒトに対し臨床上最も重要なものとされています。

1976年に米国フィラデルフィアで開催された在郷軍人会での空調設備が原因と思われる重篤な肺炎の集団発生により、古くは在郷軍人病と呼ばれていたこともありました。また、我が国ではかつて24時間風呂での感染による死亡例や温泉施設などでの集団発生例が報告されています。

レジオネラは健康な人間が感染しても発症することが少ない日和見感染の一つとされていますが、小児や高齢者などの免疫機能が低下している人が感染すると重篤な肺炎を発症することがあり、早期に適切な治療法を選択しないと予後不良となる場合があります。

臨床像には「肺炎型」と「ポンティアック熱型」があり、「ポンティアック熱型」は数日で寛解することが多いのに対し、「肺炎型」は全身倦怠感や40℃以上の高熱に始まり、劇症化すると7日程度で死に至る場合もあります。通常の市中肺炎に用いられるセフェム系、ペニシリン系等の抗生剤では効果が期待できないため、一層の早期診断が必要となります。

本検査はLAMP法により、レジオネラ・ニューモフィラを初めとしたレジオネラ属11菌種を喀痰検体で網羅的に迅速に同定するものです。

検査要項

項目コード	25604
検査項目名	レジオネラ核酸同定
検査材料 (採取容器)	喀痰:1.0mL (採取容器55番でご提出下さい)
保存方法	凍結(-20℃)
検査方法	LAMP法(Loop-Mediated Isothermal Amplification)
基準値	検出せず
所要日数	3~6日
検査実施料	300点([D023-4]微生物核酸同定・定量検査)
判断料	150点(微生物学的検査判断料)
定価	9,000円

※レジオネラ属11菌種を検査しますが、菌種の同定はできません。

参考文献

山口恵三, 他: 医学と薬学, 58(4), 565~571, 2007.